疲労

ジーというノイズは耳を離れず
一服の煙草にさえめまいを覚え
じりじりとさしてくる暗鬱な怖れに
張り替えた障子の異常な白さに
雪を感じ、再開と破局の予感

こたつは足元だけが暖かく
突然の幼児の狂った叫び
冬の疲労は独房の鉄格子の感触
グロテスクなものさえ寒さに縮こまり
存在の首を締め上げる白い空気

ぽんとひとつ弾かれるチェロが目を閉じ
次の一音を待つ私に沈黙を続けるうち
疲労の恐怖が次第に冷たく蒼ざめてゆく

(1984.12.16)